

八重山諸島



凡例

- 国指定特別天然記念物
- 国指定天然記念物
- 県指定天然記念物
- 植物
- 動物
- 地質鉱物
- 天然保護区域

石垣島東海岸の
津波石群(安座大かね)
(p118-119)

平久保のヤエヤマシタン(p108)

平久保安良のハスノハギリ群落(p114-115)

石垣島東海岸の
津波石群(バリ石)
(p118-119)

米原のヤエヤマヤシ
群落(p109)

荒川のカンヒザクラ
自生地(p110-111)

仲筋村ネバル御嶽の
亜熱帯海岸林(p121)

アサヒナキマダラセセリ
(p174)



石垣島東海岸の
津波石群(あまたりや満亮)
(p118-119)

ンタナーラのサキシマスオウノキ
群落(p116-117)

石垣島東海岸の
津波石群(高こるせ石)
(p118-119)

宮良川のヒルギ林
(p112-113)

石垣島東海岸の
津波石群(津波大石)
(p118-119)

宮崎御嶽のリウキュウチシャノキ(p120)

地域を定めず指定の天然記念物(八重山諸島)

- | | |
|---------------------|------------------|
| コウノドリ(p138) | カラスバト(p160) |
| アホウドリ(p139) | リュウキュウキンバト(p161) |
| イリオモテヤマネコ(p142-143) | イイジマムシクイ(p165) |
| カンムリワシ(p144-145) | キシノウエトカゲ(p167) |
| アカヒゲ(p146-147) | コノハチョウ(p173) |
| オカヤドカリ(p148-149) | ヨナグニサン(p178) |
| ジュゴン(p152-153) | |
| セマルハコガメ(p158-159) | |

道路凡例

- 国道
- 県道
- 市道

ひらくほ 平久保のヤエヤマシタン

📅 指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 📍 所在地: 石垣市平久保

DATA

🌿 学名 *Pterocarpus vidalianus*

📌 指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定

ヤエヤマシタンは、インドから東南アジアまで広く分布するマメ科の落葉高木で、石垣島が分布の北限です。果実は円形扁平で中央部に柔らかなトゲを持ち、周囲には麦わら帽子のようなつばがあります。また樹液は血のような赤色をしており、とても興味深い植物です。シタンは漢字で「紫檀」と書き、硬く赤みを帯びた美しい材がとれることから、昔から家具や楽器の材料として利用されてきました。かつてヤエヤマシタンは石垣島の平久保以外の地域にもたくさん生えていましたが、

伐採されてほとんど無くなってしまいました。平久保集落の北西には、高さ約20m、胸高直径が約70cmと60cmの2本のヤエヤマシタンの大木が生えています。このような大木はここでしか見ることはできません。また、2本の大木の周囲にはたくさんの幼木があり、沖繩の数少ないヤエヤマシタンの自生地として貴重な場所です。

国指定天然記念物

植物



指定地の大木



葉



参考: 果実



樹皮の様子

米原のヤエヤマヤシ群落

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 石垣市字椋海大田

DATA

学名 *Satakenia lankuensis*

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定「米原のノヤシ」

1972(昭和47)年5月15日、国指定時の名称「米原のノヤシ群落」

1973(昭和48)年4月23日、現名称に変更

1978(昭和53)年3月11日、追加指定

ヤエヤマヤシは、大きなものだとしの直径がおよそ30~40cm、高さは25mにもなり、葉を包む鞘が赤みを帯びているのが特徴です。ヤエヤマヤシの自生地としては、西表島のウブンドルと星立がよく知られていますが、石垣島の米原集落の後側、於茂登丘のふもと一面に広がるヤエヤマヤシ林は、広さと数の面から最大です。この林には、コニシイヌビフ、ショウベンノキ、リュウキュウガキ、ハマイヌビフなどの植物が生育しており、ヤエヤマヤシとともに亜熱帯独特の林を形作っています。ヤエヤマヤシは石垣島と西表島だけに生育する一属一種の貴重なヤシで、近い種は小笠原、ミクロネシア、ニューギニアに分布し、不思議なことに中間に位置する台湾やフィリピンには分布していません。ヤエヤマヤシ

シは琉球列島における植物の分布の成り立ちを知る上で大変貴重な種といえます。



群落内の様子



ヤエヤマヤシ群落

荒川のカンヒザクラ自生地

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 石垣市宇浮海大田

DATA

学名 *Cerasus campanulata*

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定

カンヒザクラは、^{ひかんぼくし}緋寒桜とも呼ばれているバラ科の落葉高木です。ソメイヨシノをはじめとする日本本土のものと異なり、^{こた}原産地は台湾や中国南部で、^{なんぽうけい}南方系のサクラです。

荒川は、石垣市米原地区の西側を流れる於茂登岳一帯を源流としている川で、その川沿いと上流域に、カンヒザクラが300本ほど点々と生えています。沖縄県内で私たちが目にするカンヒザクラは、基本的に人の手によって植えられたものですが、荒川周辺のカンヒザクラは自然に生えているもので、沖縄

で唯一の自生地です。また、荒川の地面は^{はな}花崗岩からできており、カンヒザクラが育つのに適していると言われています。一帯の森はヒカゲヘゴ、ハマユビワ、エゴノキ、フカノキ、ツルアダンなどが生育する亜熱帯樹林です。1~2月に深い緑の森に^{べにいろ}紅色の花が咲く様子が見られます。



カンヒザクラの花は下を向いて咲きます。



自生地には花崗岩がゴロゴロとしています。



カンヒザクラ自生地遠景



ヘゴの葉の間からみえるカンヒザクラ。亜熱帯の樹木に混じって自生のサクラが咲いてるのを見られるのはこの場所ならではの光景です。



亜熱帯雨林の中に咲くカンヒザクラ

用語の解説

花崗岩

地中深くのマグマが冷えてできる岩で、磨くと美しい模様がでるので石材として使われる。御影石（みかげいし）とも呼ばれる。

みやらがわ 宮良川のヒルギ林

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 石垣市字宮良地先

DATA

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、琉球政府指定

石垣島最大の川である宮良川の河口にあるヒルギ林は、島で一番の広がりを持つマングロープです。マングロープは熱帯から亜熱帯の海岸や河口の泥地に形成される植物群落で、日本では沖縄県から鹿児島県まで分布しています。

マングロープは主にヒルギ科のオヒルギ、メヒルギ、ヤエヤマヒルギから構成されるので、ヒルギ林とも呼ばれます。ヒルギ類以外の構成種としてはヒルギダマシ(クマツヅラ科)やマヤブシキなどがあります。河口や流れの速いところではヤエヤマヒルギが生え、流れのゆるやかな安定した場所ではオヒルギが生えています。そしてヒルギ類の陸側ではハマナツメやイボタクサギ、アダンなどが見られます。

潮が引いた後の湿地を観察すると、シオマネキの仲間やトビハゼ、魚の稚魚、野鳥など多くの生物が生息しており、生き物にとって大切な場所であることがわかります。



干潮時の状態



宮良川河口



林内の様子



ヤエヤマヒルギの根



オキナワハクセンシオマネキ



ヒメシオマネキ



ミナミトビハゼ

ひらく ほ や す ら ぐんらく 平久保安良のハスノハギリ群落

指定年月日: 2013(平成25)年10月17日 所在地: 石垣市宇平久保平久保牧、同宇平久保安良および両地先海面

DATA

学名 *Hernandia nymphaeifolia*

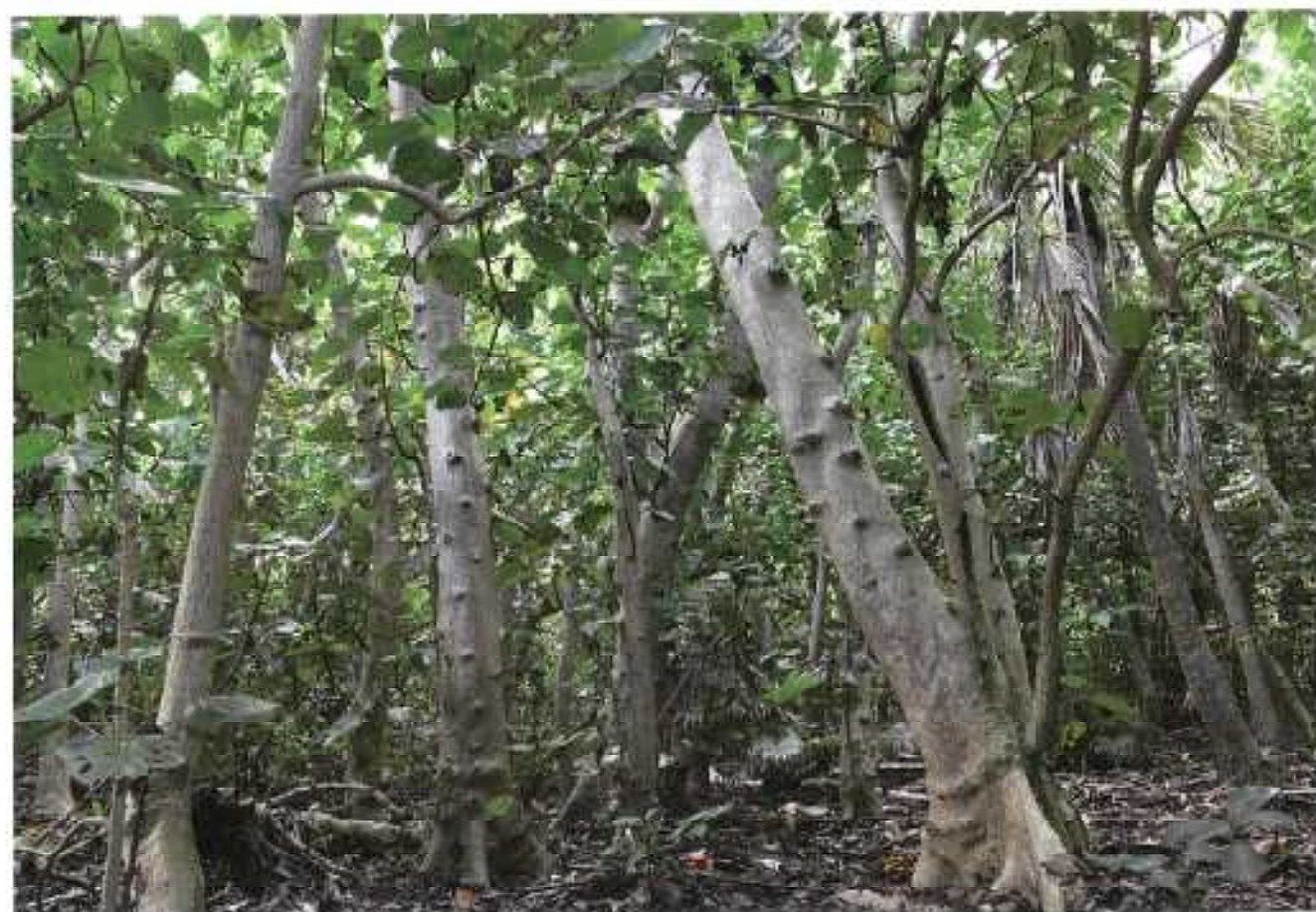
ハスノハギリは亜熱帯から熱帯域に広く分布する常緑樹で、日本では琉球列島の沖永良部島以南と小笠原諸島に自生し、海岸林を形成しています。砂地に生え、台風時には湛水に完全に浸かってしまうような場所でも枯れることなく大木に成長します。

ハスノハギリは、八重山の人々にとって昔からなじみの深い植物で、材が軽くて虫が付きにくいことから、アングマのお面を作る材料として用いられてきました。また、ハスノハギリの実先端に穴のある直径4cm程の丸い提灯のような形の袋(総苞)に包まれています。昔は、子どもたちが総苞の中にホタルを入れ、「ホタル提灯」として遊んでいました。

平久保安良のハスノハギリ林は日本最大級の規模の群落で、海域を含め148ヘクタールにおよぶ広い面積が指定地として保護されています。



ハスノハギリの幼苗。
盾形の葉の特徴がよくわかります。





ハスノハギリ林の林床の様子。



丸い提灯のような
ハスノハギリの総苞。
中にある黒い部分が果実です。



ホタル提灯

ンタナーラのサキシマスオウノキ群落

指定年月日: 2016(平成28)年3月1日 所在地: 石垣市字宮良ンタナーラ、同字宮良バシタ

DATA

学名 *Heritiera littoralis*

ンタナーラの「ンタ」は土や泥、「ナーラ」は川を意味します。この場所を流れる川の名称であると共に、現在の石垣市の野底ダム付近を指す地名でもあります。サキシマスオウノキは発達した板根をもつことで有名です。種子は水に浮き潮流によって分布域を広げるタイプであるため、マングローブ湿地など海岸に近い場所に生育します。ところが、このサキシマスオウノキは、海岸から離れた山側の標高60m以上の場所に群生しています。海岸近くにあるはずのサキシマスオウノキがこのような高いところに生えているのはなぜでしょうか。その理由として、かつてこのあたりに海岸線があったという説や津波によって種子が運ばれたという説などがあり

ますが、まだ解明されていません。

また、ここにはイタジイ群落やオキナワウラジロガシ群落など、石垣島の典型的な自然林が残されており、石垣島の自然や地史を考える上で大変貴重な場所です。



果実



サキシマスオウノキ。根本近くの屏風のようなものは根の一部で、この形から「板根」と呼ばれます。



群落内に見られるサキシマスオウノキ



倒れたサキシマスオウノキ。
根は水平に広がり、地中深くには
張っていない事がわかります。

いしがきしまひがしかいがん 津波石群

指定年月日: 2013(平成25)年3月27日 所在地: 石垣市宇大浜、同字桃里、同字平久保、同字伊原間地先

DATA

指定経緯

2013(平成25)年10月17日、追加指定

石垣島の東海岸沿いには、津波によって運ばれたといわれる大岩を見ることができます。これらは津波石と呼ばれ、指定名称の「津波石群」は、「津波大石」「高こるせ石」「あまたりや潮荒」「安良大かね」「バリ石」の5つの石をまとめた呼び名です。これらの石のうち最も大きいものは、大浜の崎原公園内にある「津波大石」で、横幅が約12m、重さは約1000tあるとされています。

先島地方では、過去に何度か津波が発生したと考えられています。「津波大石」については、石の表面に付いているサンゴの年代から約2000年前の大津波によって打ち上げられたものと推定されます。「高こるせ石」「あ

またりや潮荒」「安良大かね」は古文書の記録により、「バリ石」は年代測定の結果から、それぞれ1771年に起こった明和大津波の時に打ち上げられたものであることがわかっています。

これらの津波石群は、地質・地学的に重要な資料であるとともに、先島諸島における津波の災害を後世に伝える意味で貴重なものです。



「津波大石」の遠景及び表面の様子。岩の表面にサンゴの骨格が付着しています。

01 津波大石



02 高こるせ石



『奇妙変異記』(1776年)によると、もともと大浜村の「こるせ御殿」にあった2つの岩が、明和・大津波で流され、1つは東側海域に、もう1つは北側の「とふりや」という所に移動したとの事です。2つとも「高こるせ石」と呼ばれますが、この岩は北に動いた方です。

03 あまたりや潮荒



「あまたりや潮荒」の全体及び表面の様子。『奇妙変異記』によると、元々「あまたりや」という浜から3町(327m)の沖合にあったものが、明和・大津波で浜から陸側2町(218m)の場所に打ち上げられたと記されています。



04 安良大かね



「安良大かね」の全体及び表面の様子。鉄分を含むことから、錆びて赤っぽく見えます。『奇妙変異記』には、元々この浜にあったものが、30間(約55m)程北へ移動したと記されています。

05 バリ石



「バリ石」の全体及び表面の様子。伊原間海岸にあるハマサングの津波石。幅7~9mのだ円形で、高さ約4m、推定重量215t。ハマサングの津波石として世界最大だと国際的に認められています。「バリ石」は方言で「割れ」を意味しており、真ん中から割れているのが、名前の由来です。



宮島御嶽のリュウキュウチシャノキ

指定年月日:1959(昭和34)年12月16日 所在地:石垣市宇石垣

DATA

学名 *Ehretia philippinensis*

リュウキュウチシャノキは、国外ではオーストラリア、マレーシア、フィリピンそして台湾南東部の蘭嶼という島に分布し、沖縄の先島諸島は分布域の北限となります。日本では石垣島、西表島とその周辺の島、そして宮古島に自生していますが、いずれの場所でも数は多くありません。石垣小学校の南側にある宮島御嶽には、かつて高さ7~11mにもなるリュウキュウチシャノキがありました。現

在、敷地内には1本が残るだけになってしまいました。リュウキュウチシャノキは、蘭嶼と先島諸島の間にある台湾島には自生していません。この不思議な分布の理由はよくわかっていませんが、沖縄の植物の分布を考える上で貴重な植物です。



中央の二又に分かれている木がリュウキュウチシャノキです。



宮島御嶽内の拝殿。
石垣市指定の有形民俗文化財

県指定天然記念物

植物



仲筋村ネバル御嶽の亜熱帯海岸林

指定年月日: 1972(昭和47)年5月12日 所在地: 石垣市宇川平ヒウッタ

ネバル御嶽は、石垣市川平湾の海岸近くにある旧仲筋村の御嶽です。この場所は平坦な地形で砂地となっており、御嶽内には拝所の構造物が見られます。この御嶽のある森では、高さ10mほどの高木から足下の草本まで、段階的に高さの異なる植物が見られます。このように植物が階層状になっているのは、成熟した森に見られる構造です。もとも

と石垣島の北部地域の海岸は、ここに見られるような森が多かったと考えられます。開拓が進むにつれ、森は切り開かれ集落や畑がつくられました。しかしネバル御嶽周辺は古くから信仰の対象として大切に守られてきたため、開発や伐採をまぬがれてきました。ネバル御嶽の森は、石垣島の海岸本来の森林環境を知ることができる貴重な存在です。



林内の景観



林の前面にはなだらかな海岸砂丘が広がっています。



石門は日常空間とイビ(聖域)の境にあります。

なか かみしまうみどりはんしょくち 仲の神島海鳥繁殖地

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 竹富町仲の神島

DATA

指定経緯

1967(昭和42)年4月11日、琉球政府指定「中の神島海鳥繁殖地」

仲の神島は、八重山諸島西表島の西南約15kmのところにある、細長い形をした島です。島の周辺には魚が豊富にすんでいるため、海鳥類の繁殖が盛んなことが、昔からよく知られていました。島の周囲は崖になっており、海から見ると島は岩の壁のようです。島の中に木は少なく、ほとんどが草地となっています。

島では一番多く見られるセグロアジサシをはじめ、オオミズナギドリ、クロアジサシ、マ

ミジロアジサシ、カツオドリ、アナドリが集団で繁殖しています。その他にもエリグロアジサシやベニアジサシ、アオツラカツオドリ、カンムリウミスズメなどの貴重種を含む40種以上の鳥を見ることができます。

海鳥たちは種類によって、島にやってくる時期や巣をつくる場所が異なります。



島の遠景

国指定天然記念物

動物



斜面上に海鳥が営巣している様子

*

繁殖中の鳥たちの様子



カツオドリの成鳥(右)と幼鳥(左)

*



カツオドリの幼鳥

*



マミジロアジサシ

*



クロアジサシ

*

ふなうら 船浦のニッパヤシ群落

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 竹富町字上原 船浦

DATA

学名 *Nypa fruticans*

希定経緯

1959(昭和34)年12月16日、環境省指定

1993(平成5)年3月18日、追加指定・一部解除

ニッパヤシは熱帯地方に広く分布する一属一種のヤシの仲間で、日本では西表島と内離島だけに自生しています。また、西表島のものは世界の自生地北限として知られており、ニッパヤシの分布域や八重山諸島の植物相を知る上で貴重です。

ニッパヤシはマングローブを構成する植物のひとつで、直径50～70cmほどの根茎が泥の中を這って伸び、ところどころで二又に分かれると、その先端に芽をつけ地上に葉を出します。葉の長さは5～7mになり、数枚が束になって直立します。

船浦のニッパヤシ群落は、ヤシミナト川河口からおよそ700m上流の流域に自生しており、2015年に林野庁が行った調査では43株が確認されています。2003年頃には、周辺をオヒルギなどの植物に覆われて日光が遮られ、生育が悪い状態でしたが、覆っているオヒルギなどを取り除いた結果、現在は生育が安定してきているようです。

国指定天然記念物

植物



ニッパヤシ群落。葉は熱帯地域では、屋根を葺くのに使われます。



ヤシミナト川と生育地の様子



集合果

*



ニッパヤシの群落 (写真中央部)



花

*

ウブンドルのヤエヤマヤシ群落 ぐんらく

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 西表島東部

DATA

学名 *Satokenia hukuensis*

指定経緯

1961(昭和36)年6月15日、琉球政府指定「西表島ウブンドルのノヤシ群落」

1972(昭和47)年5月15日、国指定「ウブンドルのノヤシ群落」

1973(昭和48)年4月23日、現名称に変更

1993(平成5)年3月18日、追加指定・一部解除

西表島の仲間川を上流に向かって船で進むと、右手の斜面に広がるヤエヤマヤシの群落を見ることができます。2008年に林野庁が行った現地調査では、一帯で1769本のヤエヤマヤシが確認されています。ヤエヤマヤシ群落のまわりの山地斜面は、ギランイヌビワ、キールンカンコノキ、アオパノキ、ホソバムグイヌビワなどの亜熱帯樹林です。その中に、樹高が5~20mになるヤシが生えており、他の植物とはすぐ区別がつけます。

ヤエヤマヤシは、石垣島及び西表島だけ

に生えている固有種で、沖縄が熱帯の特徴をもっていることを示す植物の一つです。ウブンドルはヤエヤマヤシの自生地として貴重な場所なのです。



ヤエヤマヤシ群落。仲間川に面した山の南斜面にまとまって生育しています。



**



**

天然記念物調査と学生生活

沖縄県の天然記念物の調査は、たいていは大学や高校、中学校の先生方を中心に、数名から十数名ほどの調査員からなる調査隊を立ち上げて行います。もちろん、調査のすべてを調査員だけで行えるわけもないので、実際の調査には多くの協力者が必要です。そんなときに駆り出されるのが、大学の研究室などにいる学生さんです。

調査に参加する学生さんは、基本的にはボランティアです。つまりアルバイト感覚ではとても引き合うものではありません。しかし、研究者あるいは研究する人を目指す学生にとっては、天然記念物調査などは、実際の研究の生きた実践の場です。報酬とは引き替えにならないほどのメリットがあったのです。実際に、天然記念物調査の協力者の中には、その後大学院に進学し、後年には大学教授などの優れた研究者になった人もいます。

とはいえ、毎日の食べ物にも困窮している学生生活ですから、全くの無報酬というのは、実際にはきついものがあります。そこで学生さんは学生さんなりに、いろいろな対応を考えたものです。そのひとつを紹介します。まずもって天然記念物に限らず、野生生物の調査にはキャンプが必須です。調査地が集落の近くであれば、民宿などに宿泊して行くこともありますが、たいていの場合、調査地は山や森の奥です。長い距離を歩いて、毎日通うのは大変です。ケラマジカの調査で紹介したように、無人島での調査もあります。ですから、調査のほとんどがキャ

ンプなのです。

キャンプを伴う調査では、食料の調達から炊事まで、食事の一切はたいてい若者、つまり学生さんの仕事になります。そこで食料系の学生さんは考えました。できるだけ豪華な食事を摂ろうと。もちろん、キャンプ生活の中でつくれる範囲での話です。そうしてインスタント食品やレトルト食品など、できるだけ多めに買います。野外では不測の事態に対応することが必要だからです、などと言い訳をしてね。ここまでが第一段階の仕込みになります。

第二段階は、実際の調査の中で行います。それは、とにかく持ってきた食料を使わないようにすることです。現地で手に入る食材は、積極的に手に入れて使うのです。屋嘉比島のような無人島ともなれば、近くの桟橋跡から、デグスに針をつけただけの釣り具で、ほぼ入れ食い状態でした。植物を担当する学生さんは、調査の合間に食べられる野草を採ってきたりします。食べるだけの調査員たちといえば、インスタントやレトルト食品よりは、新鮮な海産物や山菜が出てくれば大満足です。又旬など出るはずありません。

そんな努力を積み重ねると、調査の終わる頃にはかなりの食料が余ります。余った食料は皆で山分け、なんてことは大人の調査員たちは言いません。ほぼ確実に、若者達で処分しなさい（つまり食べなさい）となります。そして学生たちは、往きよりも少し重くなったリュックを担いで、大学の研究室へ帰るのです。

古見のサキシマスオウノキ群落

指定年月日: 1978(昭和53)年3月22日 所在地: 竹富町宇古見

DATA

学名 *Heritiera littoralis*

サキシマスオウノキは、熱帯から亜熱帯に広く分布する植物で、板根と呼ばれる板の様な根を発達させることで知られています。日本では鹿児島県の奄美大島を北限として、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島で見られます。種子は水によく浮き、海流に乗って運ばれます。そして満潮時にマングローブ林と陸地の境や湿地までたどり着き、そこで根を生やします。

古見のサキシマスオウノキ群落の一带は、三難御嶽と呼ばれ、神聖な場所として地元の人々に古くから大切にされている場所です。1982年に沖縄県教育委員会がおこなっ

た調査では、指定地の一部に設定した調査区(1225㎡)内でサキシマスオウノキが56本見つかっています。また、これらの樹高と幹の直径を測ったところ、樹高10~15mの高木が21本、幹の直径では40~92cmの大木が10本あることがわかりました。ここにはサキシマスオウノキの他に、サガリバナやミフクラギ、リュウキュウガキ、コミノクロツグなどが生え、熱帯の森の様子を見ることができます。ここは熱帯の植物の生態や形態を研究するためにも貴重な森です。



サキシマスオウノキ群落。2007年に観察木道が設置されました。



木道沿いにサキシマスオウノキを間近に観察することができます。



サキシマスオウノキの枝葉



指定標柱



サキシマスオウノキの板根

星立天然保護区域

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 竹富町字西表 星立

DATA

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日、国政府指定「星立の
ヒルギ、ミミモチシダ、ノヤシ群落」

1993(平成5)年3月18日、追加指定

西表島西部に位置する星立集落の後側から洞内川河口に発達するマングローブ林と、星立御嶽のヤエヤマヤシの自生地が保護区域となっています。この地域には、石垣島、西表島だけに生えるヤエヤマヤシ、八重山が北限地となっているミミモチシダなどの貴重な植物が生育しています。また、マングローブ林には、ヒルギ類やヒルギモドキ(シクンシ科)、ヒルギダマシ(クマツヅラ科)、イリオモテシャミセンヅルなどの植物が生育しています。ここには、これらの植物の葉などを食べるカニ類や巻貝、林の中に泥の山をつくる

オキナワアナジャコなどの小動物がすんでおり、これらの動物を食べに鳥などが集まり、さらにその鳥などを食べるためにカンムリワシやイリオモテヤマネコなどがやってきます。このように、星立天然保護区域は、島の生態系が保たれた区域として、価値の高い場所です。



道路を境に海側と星立集落の向かい側が天然保護区域



千立集落奥のヤエヤマヤシ群落 (写真中央)



千立集落周辺の指定地



瀬内川周辺の指定地



指定標柱



仲間川天然保護区域

指定年月日: 1972(昭和47)年5月15日 所在地: 西表島東部

DATA

指定経緯

1959(昭和34)年12月16日琉球政府指定[仲間川のヒルギ林]

1993(平成5)年3月18日、追加指定

西表島の東側にある仲間川には、河口からかなり遡った上流まで海水が入り込みます。そのため、川の両側に日本で一番大きなマングロープが発達しています。マングロープは河口から約5kmのところまで生えていて、河口から上流に遡るにつれて、川の水に含まれる塩分濃度が下がるほか、マングロープが水に浸る時間が短くなるため、生えている植物が変わります。河口近くではヒルギダマシ、マヤプシギ、ヤエヤマヒルギ、やや上流に遡るとマヤプシギとヤエヤマヒルギ、更に遡るとヤエヤマヒルギとオヒルギ、更に上流ではオヒルギ林が見られます。これらの森や林が、イリオモテヤマネコやカンムリワシといった貴重な動物たちのすみかとなってい

るのです。また保護区域の干潟やマングロープの泥の上には、ミナミトビハゼやミナミコメツキガニなどが見られ、マングロープの林内にはノコギリガサミやシレナシジミなどもすんでいます。

仲間川天然保護区域は、亜熱帯特有の生態系が残された区域として貴重な場所です。



上流側



指定地全景

ふなうき 船浮のヤエヤマハマゴウ

竹富町

指定年月日: 1959(昭和34)年12月16日 所在地: 竹富町字西表 船浮

DATA

学名 *Vitex bicolor*

ヤエヤマハマゴウは、インド洋・西太平洋の熱帯・亜熱帯地方の海岸に生育する植物で、沖縄は分布の北限地にあたります。沖縄では、西表島、石垣島、内離島、竹富島の限られた地点に自生しています。ヤエヤマハマゴウは5枚の小葉(まれに3枚)がセットになった掌状複葉が特徴です。ミツバハマゴウの変種とされることもあります。先端から2番目の葉(側小葉)に柄が無いミツバハマゴウに対し、柄を持つことなどで区別できます(中西, 2020)。

船浮集落へは外部からのアクセス道路が無く、白浜から船で渡ることになります。ヤエヤマハマゴウの指定地は船浮港のすぐ近くです。指定されているヤエヤマハマゴウの高さ

は3~5mほどで、幹が倒れながら伸び、そこから多くの枝がいろいろな方向に伸びていきます。いわゆる「あばれる樹形」といわれるものですが、貴重な樹物なので大切にしたいものです。船浮小中学校の校章は5枚葉にペンで、ヤエヤマハマゴウを図案化したものです。



ヤエヤマハマゴウの花



ヤエヤマハマゴウ指定地



船浮小中学校の校章

ヤエヤマハマゴウの葉

県指定天然記念物

植物

与那国島久部良岳天然保護区域

指定年月日: 1985(昭和60)年3月29日 所在地: 与那国町字与那国清田原

与那国島の西部に位置する標高195mの久部良岳では、風当たりの強い中腹から山頂にかけてその大部分がビロウに覆われています。この場所はビロウと低地林の構成種を併せ持つ、与那国島だけの極めて貴重な森です。また、山麓部にはアカギ、モクタチバナ、ショウベンノキ、フカノキなどのヨナグニサンの幼虫の餌となる木が豊富にみられ、

ヨナグニサンの主要な生息地でもあります。そのほか、リュウキュウキンバト、ヨナグニカラスバト、アカヒゲ、キシノウエトカゲなどの天然記念物の動物やその他の貴重な動物の生息地でもあり、与那国島の生物の成り立ちや八重山諸島と台湾との関係を知るために重要な森です。



久部良岳の風景

県指定天然記念物

★ 天然保護区域



山の中腹以上はビロウ(クバ)に覆われています。*



林内は他のビロウ林とは異なる機相を示します。*



久部良岳の生き物

ヨナグニサン



県指定天然記念物

★★

アリサンバライチゴ



台湾との共通種で国内の分布は
与那国島のみ

★★

オオガラエダナナフシ



与那国島固有種

★★

ノブオオオアオコメツキ



与那国島固有種

★★

アオヒメハナムグリ



与那国島固有亜種

★★

ヨナグニチャイロカナブン



与那国島固有亜種

★★

ヨナグニゴマフカミキリ



与那国島固有亜種

★★

モリバッタ



与那国島固有亜種

★★



与那国島には島の固有種のほか、八重山諸島と共通する生物と、台湾と共通する生物が生息しているよ。久部良岳はこのような貴重な生物が数多く生息する場所なので、生き物を観察するときは傷つけないよう十分注意しよう。もちろん全ての動植物の無許可採取は禁止だよ。

与那国島宇良部岳ヨナグニサン生息地

指定年月日: 1985(昭和60)年3月29日 所在地: 与那国町宇与那国宇良部

宇良部岳は、与那国島の東部に位置する標高231mの山です。山頂一帯に沖縄県では沖縄島北部と与那国島だけに見られるウラジログシの森が発達し、中腹部には低地林に典型的な植物を多数含んだイタジイの林があります。このイタジイ林から南側の新川界にかけては、石灰岩を基盤とする低地林が発達しています。これらの地域には、アカギ、モクダチバナ、ショウベンノキ、フカノキといったヨナグニサンの食樹(幼虫の餌となる木)が豊富に生えており、ヨナグニサン

の主要な生息地となっています。この宇良部岳一帯の地域は、与那国島の植物を考える上でも貴重な場所であり、様々な動物たちの生息地でもあります。



ヨナグニサン



宇良部岳

※